

ブレイズンへの視線―

『恋におちたシェイクスピア』覚書

英語英米文学科教授 村里 好俊

(イギリス・ルネサンス文学)

この映画(『恋におちたシェイクスピア』*Shakespeare in Love*)は、第七一回アカデミー賞の最優秀作品賞、最優秀主演女優賞、最優秀オリジナル脚本賞など七部門、第五六回ゴールデン・グローブ賞の最優秀作品賞、最優秀主演女優賞、最優秀脚本賞の三部門、その他数々の栄誉ある映画賞を授与された。とりわけ特筆すべきは、最優秀脚本賞を授与されたことから分かるように、アメリカのシナリオ作家マーク・ノーマン Marc Norman と、出世作『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』等で有名な、英国を代表する劇作家トム・ストッパード Tom Stoppard とのコンビは、綿密な時代考証を重ね、緻密に磨かれ考え抜かれた文章を駆使して、色々な意味で極めて秀でた内容の脚本を仕上げている。

この映画の時代設定は一五九三年の夏。間歇的に疫病がロンドンを襲い、劇場が閉鎖されている時期で、当時二大劇団とされた「宮内大臣一座」と「海軍大臣一座」の

内、後者の座主かつ経営者であるフィリップ・ヘンズロウ Philip Henslow (?-1616) は、劇場閉鎖ゆえの借金苦に喘いでいる一方、前者の座主で花形俳優のリチャード・バーベッジ Richard Burbage (1567-1619) は、饗宴局長ティルニーの介添えもあり、エリザベス女王の思召し召して宮廷に呼ばれ、宮廷の宴会の間で、シェイクスピア作の喜劇『ヴェローナの二人の紳士』を、ヘンズロウから盗んで上演する。もともと、当時、版權などは明確でなく、劇作を盗んだり盗まれたりするものは、日常茶飯事ではあったが。とはいえ、目下の状況では、明らかに、バーベッジにやや分があるようだ。

故郷を離れ、ロンドンで一人暮らしをして数年が経過したシェイクスピアは、二九歳になっていた。二一歳になる前に三人の子供たちの父親となり、その数年前から実父の商取引失敗による没落で働き口を必死に探していたであろうシェイクスピアが、故郷のストラットフォードの実家に妻子を預け、何らかの伝を頼ってロンドンで一旗挙げようと上京し、何が切っ掛けかは判然としないが、劇団に雇われ、恐らく初めのうちはこの映画に出る何でも屋のピーターのように、様々な雑用をし、役者として舞台にも上がった後に劇作家になり、一先ずはやっと一人前の詩人・劇作家として活躍を始めていたが、一〇作ほどを書いた現在は、作家としての袋小路に陥っているとところから、この映

画は始まる。映画の中では、ウイル（ウイリアム・シェイクスピア）はその事情を「靈感を与えてくれるミューズ女神、つまり真の魂を共有し合う、愛する女性」がいないからだと述べるが、実は、彼の劇風がちょうど転換期にあり、これまで書いてきた自作の芝居に満足できなくなっていることに、彼はまだ気づいていない。この映画は、『ヘンズロウの発案で、新しい喜劇『ロミオと海賊王の娘エセル』を上演することになり、ロミオ役を演じる有望な若手俳優をオーディションで探すことになった時、ウイルが、単身赴任のロンドンで、とある成金貴族の令嬢ヴァイオラ姫と恋に落ち、その体験を基にして現在進行形という形で有名な悲劇『ロミオとジュリエット』、そして二人の悲恋の後日談としてヴァイオラを女主人公とし、彼の喜劇の最高峰とされる『十二夜』が生まれたことを、極めてスリリングでドラマティックに描いた秀作である。

この映画の中で、デ・レセップス家で開催された舞踏会へ楽団員の一人に成り済まして忍び込んだウイルは、当家の令嬢ヴァイオラが踊っているのを見て、彼女に一目惚れする。この状況は、『ロミオとジュリエット』の中で、ジュリエットの屋敷での仮面舞踏会に友人たちと共に忍び込んだロミオが、ジュリエットに一目惚れする場面に転用されることになる。シェイクスピアと同年齢だが、詩人・劇作家として彼よりずっと早くデヴィューし、すでに人気

作家になっていたクリストファー・マーロウ（Christopher Marlowe 一五六四〜九三）が自作『ピアロウとリアンダー Hero and Leander』第一卷一七六行で“Who ever loved that loved not at first sight?”「今まで恋をした者で、一目惚れでなかった例があるうか」と歌っているように、当時の恋の慣例に沿ってウイルは一目で恋に落ちてしまうのである。図らずも、ヴァイオラは詩人・劇作家シェイクスピアの最大のファンで、彼の詩劇を通して、彼に密かに思い焦がれていた。

いやしくも貴族の令嬢が下々の者に交じって川向こうの歓楽街サザック地区にある劇場に芝居見物に行くのは避けるべきことであり、もし、どうしても芝居を見物したければ、女王陛下が宮廷に劇団を呼びつけて宮廷の宴会場で芝居見物されるときに他の宮廷人と一緒に見物すればよいと言う乳母に反して、ヴァイオラは芝居に出たくて、それも、当時は舞台の上に女性が上がることは法律で禁止されていたので、トマスという田舎出の若者で乳母の甥という触れ込みでオーディションを受け、ロミオ役を見事に射止める。トマスが実は愛するヴァイオラ姫だということを知らないウイルは、彼女への恋文と恋歌（ソネット十八番）を

1 大塚定徳・村里好俊訳、『イギリス・ルネサンス恋愛詩集』、大阪教育図書、二〇〇六年、一二頁。

トマスに託すが、彼女からの涙で滲んだ手紙をトマスから受け取ることになる。彼女の意思にかかわらず、貴族であるウエセックス卿と結婚することが、彼と彼女の父親との間で、まるで商取引をするかのようになり、取り決められてしまっていたのだ。

ウィルは、テムズ川を手漕ぎの小舟（いわば、水上タクシー）に乗って自分の屋敷へと戻ろうとするトマスを他の小舟で追い掛け、トマスの小舟に乗り移って、トマスに向かってヴァイオラに対する思いの丈を打ち明けようとする。その重要な場面で、ウィルはトマスに向かって“oxymoron”と“blazon”²という当時よく使われた詩の技法を用いて、次のようにヴァイオラ姫の美しさを称揚する。

Viola as Thomas: …… Tell me how you love her, Will.

Will: Like a sickness and its cure together.

Viola as Thomas: Yes, like rain and sun, like cold and heat.

2 「オクシモロン」とは、矛盾・撞着語法で、意味が全く相反する言葉を結びつけて、より強烈な表現を作る技法であり、「ブレインズ」とは、女性の美をカタログ形式で順序よく並べ、他の美しい品々に喩えて一つずつ称揚する技法のことである。一四世紀イタリヤの詩人ペトルルカを範として、ルネサンス時代の英語詩人たちに愛用された。

3 Mare Norman & Tom Stoppard, *Shakespeare in Love*, ed. by Fumiko Kosai & John Cronin. 松柏社、二〇〇〇年、六四～五頁。

(*Collecting herself*) Is your lady beautiful? Since I came here from the country, I have not seen her close. Tell me, is she beautiful?

Will: Thomas, if I could write the beauty of her eyes! I was born to look in them and know myself.

He is looking into Viola's eyes. She holds his look, but Will belies his words.

Viola as Thomas: And her lips?

Will: Her lips! The early morning rose would wither on the branch, if it could feel envy!

Viola as Thomas: And her voice? Like lark song?

Will: Deeper. Softer. None of your twittering larks! I would banish nightingales from her garden before they interrupt her song.

Viola as Thomas: She sings too?

Will: Constantly. Without doubt. And plays the lute, she has a natural ear. And her bosom — did I mention her bosom?

Viola as Thomas: (*glinting*) What of her bosom?

Will: Oh Thomas, a pair of pippins! As round and rare as golden apples!

Viola as Thomas: I think the lady is wise to keep your love at

a distance. For what lady could live up to it close to, when her eyes and lips and voice may be no more beautiful than mine? Besides, can a lady of wealth and noble marriage love happily with a Bankside poet and player?

Will: (*fervently*) Yes, by God! Love knows nothing of rank or riverbank! It will spark between a queen and the poor vagabond who plays the king, and their love should be minded by each, for love denied blights the soul we owe to God! So tell my lady, William Shakespeare waits for her in the garden!

Viola as Thomas: But what of Lord Wessex?

Will: For one kiss, I would defy a thousand Wessexes!

She kisses him on the mouth and jumps out of the boat.

Viola as Thomas: Oh, Will!

She throws a coin to the Boatman and runs towards the house.

この場面では、ヴァイオラ扮するトマスのセリフには「疑問符?」が多用され、彼女の不信と不安で一杯の気持ちを表している一方で、ウィルのセリフには、「感嘆符!」が

多用され、彼の激しい恋の情熱を物語っている。そして重要なのは、この場面の最後で、ヴァイオラが万感の思いを込めてウィルにキスをし、「おお、ウィル!」という「感嘆符!」で話を終える所である。最後には、ウィルの真の愛情を真摯に受け止めて、彼女は、ウィルの必死の訴えに同感しているのだ。

ところで、当時流行の「ブレイズン」の技法を駆使して歌った有名な詩がある。まずはそれを次に紹介したい。

一六世紀後半の詩人サー・フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney 一五五四～八六) の代表作『ニュー・アーケイディア *New Arcadia*』第二巻第一章で、パメラ姫、フィロクレア姫、御付のマイゾ、そしてアマゾン女戦士ゼルメインに女装したマケドニア王子で本編の主人公の一人ピュロクレスの一行は、ペロポネソス半島中部に位置し、古代ローマの代表的詩人ウエルギリウスがその『牧歌』で理想郷として称えたアルカディア国の人里離れた森の中を流れる川での水遊びに出掛ける場面が描かれる。本当の女性と思われて水遊びに誘われたピュロクレスは、風邪を口実にそれを断り、川の傍で王女たちが丸裸で水遊びをしている模様を観察し、愛するフィロクレア姫の優美な姿態を“blazon”の技法を駆使して、次のように歌う。⁴

4 この詩の場合、まず肉体の前面を髪から足まで降りて行き、次に、

かのひとの完璧な美の品々を、どんな言葉で尽くせるものか
百万言を費やして誉め称えても、一の品さえ覚束ぬ

彼女の髪は、純金の細い糸

結び上げし巻毛となりて、恋人の心を縛る

そこに額が進み出て、「わたしのなかに

背面を肩から手の指へ進み、最後に内面の魂の美を称えて結んでいる。稀に見るほど精巧なブレイゾンで書かれたこの歌は、シドニーが若い頃に書いて以来、最も多く修正加筆を加えた歌であって、当時、転写や復刻や言及が数多く見られることから、エリザベス朝宮廷人のいわば《愛唱歌》になつていたらしい。この詩のイメージは「純金の細い糸」、「鯨の骨のように白い」など平板な比較表現が見られるにもかかわらず、独創的な創意に満ちている。この詩が高度に技巧的であるのは、いわば《不意打ち技法》を利用して、初めは誇張し矛盾したイメージと映るもので鬼面人を驚かすが、よく考えれば、完璧な適切性と予期しない関連性が浮かんでくるという特徴があるからである。一例として、姫君の薄い蒼色の眉は、彼女の眼である二つの黒い星の上に弓形にかかる三日月であつて、眼を閉じると、大胆不敵な挑戦を阻止すると描かれる。これは視覚的誇張表現であるが、巧みに姫君を大空の全ての美と関連づけている。黒い星は矛盾・撞着語法 (oxymoron) だが、フィロクレアの瞳は、当時の通例の美女の眼の色とされる「紺碧碧眼」ではなく、実際黒いのだから、見事に叙述的である。閉じた眼は、恋する男たちの猥らな視線を撥ね付けるが、純潔の女神である月(眉)の下でそうするのだ。新しい形而上学的文体を弄んだ後輩詩人たちが、この詩の機知に富む綺想を喜んだのは無理もないと思われる。初稿の『オールド・アーケイディア』では、「第三巻」の終わりの方で、ピュロクレスが、二人の愛の成就の直前、ほとんど裸同然でフィロクレアが眠っている

なお純白の美しさ、見えるでしょう」と

まさしく純白、冷たき冬の厳顔に

降り積もる、新雪より白し

額には、よく釣り合った平らかな眉⁵

同じ長さの直線が、角度を曲げて

新月の後、三日月頭

延ばす時の、月の様子に似たりかな

弓形の眼は、天の目蓋

閉じきれば、大胆不敵な企みを阻止す

天球には、二つの黒星が鎮座し⁶。

のを観察しているときに、この歌を思い出すことになっている。(尤も、語り手が断っているように、この長い歌の歌詞をそっくりそのまま思い出す余裕はなかったはずだが。)『オールド』では、この歌は孤独な羊飼イフィリジデス(=シドニーの分身)の作とされ、彼が黒い瞳のつれない恋人、ミラへの貢歌として、かつて捧げた歌であるが、改訂版である『ニュー』では、ピュロクレス本人の作として、より直接的で、より劇的な役割を与えられている。

5 スペンサー『妖精の女王』第二巻第三篇二五節では、美しい処女ベルフィービの「まぶたには、その整った「釣り合った」まゆの陰に／多くの美の女神たちが宿つて／美しい顔つきや愛嬌を作り／だれもが乙女にそれぞれの美を与え／だれもが乙女にやさしくおじぎをしている」と描写されている(和田勇一、福田昇八共訳)。つまり、皺一つないすべらかな額に、整い釣り合った眉毛が座っているのである。当時、黒い眉毛を形容するのに、*convex*と発音も綴りも似ている *convex* (漆黒の) を使った慣習に、これは対応している。

6 『アストロフィルとステラ』「第五歌」、一〇〇―一一行に、「ぼく

比類なき一對、称賛も名折れ

人工の技で作られし、いかなランプの灯火も

目映く遍く照り渡る、天つ太陽も

無比の黒い瞳に、比べようとてなく

ただ瞳と瞳が、清澄さを競い合う

一つ不幸なことに、瞳は

片方の瞳の美を、確かめられぬ⁷

彼女の頬は、天然無垢のクラレット

太陽神の雄々しさに、顔赤らめし

寝所から抜け出たばかりの、曙の女神

もぎたての、クイーン・アップルの腹⁸

はいった、そなたの眼は星々、そなたの胸は天の川、そなたの指はキューピッドの矢柄、そなたの声は天使の歌と」と、ステラの美が称揚されている。

7 「眼は自分と瓜二つの美しいものを見ることが出来ない」というような表現には、当時いくつかの例が見られる。

8 ベン・ジョンソン『古ギツネ——ヴォルポーネ』四幕二場七二—三行に、「ただちよいとお鼻が赤いようで、おてんとさまの当たるほうが赤味をつく／林檎みたいに、その鼻もやっぱり片方が赤くなつてますなあ」（大場建治訳）、スペンサー『羊飼いの暦歌』六月、四二—三行に、「あのころは、私のロザリンドに与えるために／まだ青いマルメロ「クイーン・アップル」の実を捜し歩き」とある。花言葉は誘惑。これは、ウエルギリウス『牧歌』第二歌五行の「ぼくはマルメロを——うっすらと白い粉をふいた実を／それから栗と胡桃を自ら摘もう」に倣つたとされる。

彼女の鼻、顎は、純粋な象牙をまとい

かわいらしい耳は、これに劣らず清純

象牙の耳には、血の筋が浮き出て見え

ワインとミルクが、程よく交ぜ合わさったよう

耳の小さい渦の中を、覗き込めば

視線は、愛の迷路を踏み迷う

意地悪な曲がり角、声を迷わす

言葉は道案内なくば、奥への道が分からない

耳朶は、宝石で飾らずとも

耳朶自らが、極上の宝石

赤く膨らんだくちびるを、だれが見逃そうや

幸いなるかな、いつも自らに接吻するくちびるは

価値は紅玉、味わいは桜ん坊、

完璧な色合は、咲き初めし花薔薇はなそうび

くちびるが離れると、二列に

並んだ、貴重な真珠が拝おがめる

真珠は、第二陣の愛らしく囲われた柵。

9 『アストロフィルとステラ』「第五歌」、三八行に、「紅玉に隠れた真珠の列」とある。真珠の歯と紅玉の唇は、スペンサー『妖精の女王』第二巻、第三篇、二四節に、「話をするときは、したたる蜜蜂のような甘美な言葉を使い／真珠とルビーの間から、天上の音楽かとも思える／銀鈴を振るような声をやさしく出すのであった」、また『アモレッティ』八一番、九—十二行には、「けれど、一番うるわし

天の甘露に濡れた舌を、護衛する

そこからは、言葉が無駄に流れ出たためしなし

くちびるの下に、凜々しく堂々と聳えるは

この貴重極まる芸術作品の、柄

妖しい魅力が潜む、首

かくやならんか、築の大家が大公の四阿あずまやに

贅を尽くして、建てし塔

食欲をそそられて、視線が

今少し下へと、さまよえば

覗けるは、胸の愛らしく撓たわわな房

ヴィーナスの息子の、気ままな住処すみか

透明な大理石の、真ん丸い柄頭つかがしら¹⁰

青い静脈が、見事に浮き上がり

この上なく大切な、赤紫色の頂点と溶け合う

両の乳房の間には、一本の途

乳の名を持つ、天の路よりも

いのは／真珠とルビーで豊かに飾られた門が開いて／やさしい心の
言伝てを伝える／賢い言葉が流れ出る時」(和田・福田訳)とある。
ちなみに、当時の諺に、「齒が舌を警護するのは、りっぱなこと」が
ある。

10 ここには、シドニーが当該作品を書くに当たって典拠の一つと
した、サンナザロ『アルカディア』の「二つの赤い林檎(あるい
は柄頭)」の影響がある。女性の乳房を柄頭に準えた例は、O.E.D.に
記載してある。

美の殿堂に、祭るにふさわしい途

途は、喜び溢れる野原へ続く

一面、白百合の花畑¹¹

天然の、甘い芳香は

インド産の、高価な香料さえ凌ぐ

その名は腰、男の命を

ボロボロになるまで、腰砕けにするから

白の装束に固めた、彼女の肋骨は

見えたり、見えなかつたり

抗う岩を、抱擁せんとするときの

大海原の泡立つ顔より、なお白し

喜ばしい品々に埋もれて、旅人の想いは

道に迷って、両側をさすらうが

彼女の臍が、精妙な円の中へ

忙しい視線を、繋ぎ止める

臍は処女蠟の、優美可憐な封蠟

欠けたるは、押印のみ¹²

11 恐らく、彼女の清純・可憐さと同時に、肌の白さに言及している。
12 シェイクスピア『ヴィーナスとアドニス』五一―六行に、
「きよらかな唇よ、わたしの柔らかな唇に捺された心地よい捺印よ／
あなたにいつまでも唇を捺してもらうために／どんな契約をしたら
いいのか／自らを売ることもわたしは厭わない／あなたが買い取り、
支払い、それをよく遇してくれるなら／もしあなたがこの契約を結
ぶなら、約束を破られないように／あなたの印章をわたしの紅い唇

彼女の丸い腹は、喜びに震える視線を占拠する
いみじくも、命名はキューピッドの丘

愛神を迎えるに、打ってつけの丘

一点の汚れなき、雪花石膏アラバスターの鉱石

正しく美しい、滑らかな雪花石膏

しかれども、柔らかさしなやかな繻子のごとし

この甘美な御座で、愛神は戯れる

しづしづ私は、愛神の遊び場を離れる

最良のものは、常に忘れ去らねばならぬのが

これまで、世の常であつたから¹³

彼女の太腿を、どうしても歌い忘れてはならぬ

オウイディウス直伝の恋歌には、なくてはならぬ¹⁴

の封蝋の上に捺して下さい」とあるのが参考になる。大塚定徳・村里好俊訳、『新訳シェイクスピア詩集』、大阪教育図書、二〇一一年、三三頁。

13 当時、「恥知らずな世の中は最良のものを恥ずかしがる」とか「最良のものは誤用される」という言い方があつた。

14 例えば、オウイディウス『恋の歌』巻一、五番「昼下りの恋」は、若い娘コリンナの裸体を思いがけず目撃したことを歌い、そのえもいわれぬ美しさを誉め称えている。「着ているものを脱ぎ捨てて、僕の目の前に立つと／全身どこにも非の打ち所がなかった／何という肩、何という腕を僕は見て、触ったことか／乳房の形は抑えるのに何と適していたことか／何と張りつめた胸の下におなかは平らなことか／何と長く、何とすばらしい脇、何と若々しい太もも」（一六〇二二行、中山恒夫訳）。クリストファー・マローウの翻案では、「何と肉付きのいい脚、何とぴちぴちと張りのある太腿よ」となっている。

内腿は、二枚の砂糖菓子で側面を被われ
堂々と膨らんだ土手を、盛り上げて

純白なこと、アルビヨンの絶壁に優る¹⁵

姿見のごとくツルツルした、臀部がそこにくっつく

一同跪くのだ、いま彼女の膝について

想像の目が見えるものを、わが舌が語らんとする

喜びの玉飾り、愛の宝玉

一つの動作に、あらゆる優美が伴う

屈曲部は、優れた画家よろしく

明暗法の技巧を、冴え渡らせる

靴下を留める箇所が、子供っぽい印で

ふくよかな肉質には、容易跡が残ることを示す

今一度、凛々しいふくらはぎのところ

水晶天のごとく、盛り上がる

それを支えるアトラスは、しごく華奢だが¹⁷

15 ドーヴァアの白亜の絶壁のこと。フランス側から船で渡ってその壁が迫ってくるとき、絶景である。

16 恐らく、シドニーは、当時の高名な細描画家ニコラス・ヒリヤードとの直接の会話からか、あるいは彼の著書『細描画の技法』を読んだかして、この箇所を書いている。つまり、細密画家は丸みを表現するために、陽光部を引き立つように白く塗るのであって、回りを暗い影にするのではないという技法に言及している。

17 フィロクレアの肉体という美の世界、具体的には、彼女の丸みを帯びたふくら脛という天空を支えている踝を、全世界を支えてい

鯨の真つ白な骨よりも、なお白い

すつくと伸びるは、ふつくらした清らかな足

この高貴なる杉の木の、高価な根¹⁸

外観と匂いは、淡い色の葦草

一步一步が、大地にあらゆる美の種を蒔く

彼女の背中に戻るのだ、わが歌神よ

羽を落とした、レダの白鳥さながら¹⁹

背筋に沿って、骨が合わさる様は

丸いマーチパンの、砂糖菓子のごとし

彼女の肩は、二羽の白い鳩に似て

るアトラス「運ぶ者、耐える者の意。巨人族の一人で、オリュンポスの神々に巨人族が反逆したときに加担したために、その罰として天空を双肩にて担うことになったという」に準なぞらえているのだが、フィロクレアの踝の細さとアトラスの盛り上がった筋肉との対照が絶妙である。

18 「杉の木」は、フィロクレアのすらりと伸びた背丈のこと、「高価な根」は、彼女の足のことである。「面白い綺想ではある」。

19 妻のヘラの目を盗んでレダに近づき、彼女を掻く攫うため白鳥に転身したジョーブ大神は、首尾よく思いを遂げて、結果的にその後の人間世界の激動の原因となる二人の名高い女性、クリュタイムネストラ「トロイ戦役のギリシャ方の総大将アガメムノンの妻、しかし凱旋した夫を、愛人と共謀して殺害してしまう」とヘレナ「トロイ戦役の原因を作る世界一の美女」とを生ませる。この挿話はよく詩歌に歌われ、また、絵や彫刻の主題となった。ここでは、「もはや偽装する必要がないゼウスが、純白の羽を切り落としその場「フィロクレアの背中」に置いて行く」という意味で、彼女の真つ白な背中を表す迂言的表現である。

四角い王宮の屋根に留まる²⁰

屋根は、白銀しるがねの皮膚で葺ふいてあり

わずかの染みも忌み嫌う、アーミンの雪白に優る²¹

肩から突き出でし、二本の腕

不死鳥の翼も、これほど完全無比にあらず

非の打ち所なき長さと、汚れ一つなき色合と

ああ、悲しいかな、新たな苦悩が蘇る

20 「二羽の鳩」から発展した、極めて持つて回った綺想。当時屋敷の屋根が鉛葺ふきであったように、彼女の肩は銀の皮膚で葺いてあるというのである。

21 アーミン(テン)は北欧に棲息し、冬には尾の先だけが黒く、他は全身純白になるイタチ科の動物で、自分の体がほんのわずかでも汚れるよりは、死を選ぶ「火中をもくぐる」と信じられていた。それゆえ、アーミンを捕獲するときには、回りを糞の壁で囲む方法が利用されたという。ルネサンス期の寓意画集では、「純潔・清純」、あるいは「一途な心」を表象するとされる。有名なハットフィールド屋敷所蔵の「エリザベス一世の〈アーミン肖像画〉」はヒリヤードが描いたものである。また、当該作品の中では、カランダール卿の跡継ぎ、クライトフォンの楯には、「汚名より死を選ばん」という訓言付のアーミンの紋章が彫られている。(民間伝承では、アーミンは田畑にいるときには幸福をもたらすが、その視線は病気の原因になり、息は死をもたらすことがあるとされる。)

22 世界に一羽しか存在しないとされる伝説の鳥。死ぬときには、ぐるぐると渦を巻きながら、自分の体を燃やし尽くし、残った灰の中から一羽の新しい不死鳥が誕生するとされる(異説もあるが)。寓意としては、復活、不滅性、永遠の青春、貞節・節制、驚異的な存在、自己充足・自己犠牲、キリストの受難と復活などを表す。

次に歌う順番は、彼女の手
わが初恋の、運命の絆

玉座には、清白が永遠に君臨す
造化の女神自らが、それに彩色す

暖かい雪、湿った真珠、柔らかい象牙が²³
そこでは、不思議に交ざり合い

サファリア色の小川が、幾筋も流れ下り
複雑に蛇行する、人造の運河のごとく

馨しい土地に、馨しい鳥を無数に作る
手の指、それは

アメジストの、矢尻を付けた
愛神の武器、血に濡れた矢だ

かく、それぞれの品はそれぞれに美しき
麗しき三美神は、いかなる技にて

23 矛盾・撞着語法の一例。ペトルルカの「冷たき炎」以来、特にルネサンス時代の詩人たちには好んで多用された。例えば、『アストロフィルとステラ』第五歌三七行「暖かい、うまし香りの雪」、シエキクスピア『真夏の夜の夢』五幕一場五九行「暑い氷、とても不思議な雪」、『ロミオとジュリエット』一幕一場恋を恋するロミオの台詞「おお、争う恋、恋する憎しみ／おお、もともとは無から生じた有なるもの／おお、心しむむ浮気心、きまじめなたわむれ／美しい秩序と見せかける醜い混沌／鉛の羽根、輝く煙、冷たい火、病める健康、眠りとは言えぬ常に目ざめる眠り／こういう恋を感じながら肝心の恋人はつれない」など枚挙に暇がない。

彼女の四肢に、特段の優美を授けるのか
どんな時にも、どんな場所にも和合し
美をも、なお美々しくし

哀れな目をこそ、一番誘惑する優美を

だが、これとても、内部に宿る

より麗しい客人達の、麗しい宿に過ぎぬ²⁴

麗人への高き称賛と、称賛に満ちた祝福の

ペンとなるのは善徳、紙には天

不滅の名声が、インクを貸し出す²⁵

24 「客人達」とは、フィロクレア的美徳の数々。それが美しい彼女の肉体という宿に宿っているというのだ。このように、肉体の美を一つ一つ取り上げて長々と称えた後で、翻つて、精神の美、美徳を最後に絶賛するのは当時の詩の常套手段だが、これはヘパリノウド・取り消しの歌の手法といつていい。

25 不滅の名声による詩の永続性というテーマについては、オウイデウス『軼身物語』巻一五の結び、「詩人の予感の中にも一片の真実が含まれているものならば、わたしは、「この詩を完成したことにより」世紀の続く限り名声によつて生き続けるであろう」（田中、前田訳）、ウエルギリウス『アエネイアス』第九巻四四六〜七行「おお幸運のこの二人！ もしいやくもわが歌に／その能力があるならば、二人を時の記憶より／消す日は永劫ないであろう」、並びにシドニー『詩の擁護』結末近くの「詩人達は神々に深く愛されているが故に、彼らが書くものは何であれ、神聖な靈感から生まれる。最後に、詩人達が彼らの韻文によつてあなたを歌い不滅に致しますと告げるとき、彼らの言葉を信じてほしい」などを参照。

歌い初めと同じ言葉で、歌を終わらぬ

かのひとの完璧な美の品々を、どんな言葉で尽くせるものか
百万言を費やして誉め称えても、一の品さえ覚束ぬ²⁶

この歌がその典型であるが、オクシモロンとプレイズンの技法を駆使した歌が一六世紀後半のイングランドの詩人たちの間で数多く作詩され、よく読まれた。芝居好きで本を読むのが好きなヴァイオラは、この類の詩をよく知っていたのである。彼女がウィルに「どれくらい彼女を愛しているのか教えて」と尋ねるとき、彼が「病に臥せるのと、治癒とが一緒になったように」と答えるのを聞いて、その技法を熟知しているトマス扮するヴァイオラは「そうなの、雨が降り、同時に太陽が輝くように。寒いと同時に暑いようにね」と切り返す。そして、「僕は彼女の美しい瞳を覗き込んで己を知るために生まれたのだ」と豪語するウィルは、ヴァイオラの瞳を覗き込み、彼女と目と目をしっかりと合わせながらも、彼女をトマスと思い込んでいた。め自分の言った言葉を裏切って、彼女の正体に気付かない。ヴァイオラは彼と口裏を合わせるかのように、当時の流行に乗ってプレイズンを多用する彼を茶化そうとして、

26 村里好俊訳解、『ニュー・アーケイディア』第二巻、大阪教育図書
一九九七年、一二六～一三三頁。

「では、その人の唇は」と尋ねる。彼女の狙い通り彼女の挑発に乗って、ウィルは当時の歌の例に倣い、「彼女の赤い唇に嫉妬して朝咲きの薔薇も咲いた途端に萎れる」とか、「彼女の歌う声は囀る雲雀より、夜啼鶯より、深くて柔らか」と言う。眼を鋭く光らせて、「彼女の胸はどうだつて言うの」とヴァイオラに聞かれたウィルが、「一對の小ぶりの林檎。黄金の林檎のように丸くて類い稀」と答えると、ヴァイオラは、ここぞとばかり、攻撃に撃って出る。「その女性があなたの愛を遠ざけておくのは賢明なことだわ。だって、一体どんな女性があなたの期待にぴったりと応えられるというの。その女性の瞳も唇も声も、私と同じく、美しくないかもしれないのに。それに、裕福な家に生まれ、貴族と結婚するはずの女性が、川向うの詩人・劇作家風情と幸せな恋ができますか？」それに対して、ウィルは熱を込めて「愛には身分・職業は関係ない、女王と王様役を演じる貧しい浮浪者との間に愛の炎が燃え上がる時もあるし、愛が拒まれれば、魂が干上がる」と応答する。そして、今度は虚言的言葉を弄するのではなく、真摯な真心を込めた自分の言葉で、「だから、愛する姫君に伝えてくれ、ウィリアム・シェイクスピアが庭でお待ちしている」と情熱的に宣言するのだ。これを聞いたヴァイオラの「でも、(求愛者の)ウエセックス卿はどうするの」という問いに対する、彼の「ただ一度のキスができるなら、

一千人のウエセックスに挑んでみせよう」と威勢のいい言葉に励まされて、ヴァイオラは彼の唇に万感の愛を込めてキスをし、小舟から自宅の庭に隣接した波止場へ飛び下りるのである。

この場面でウィルは、初めはありきたりの技巧的な言葉を弄して、ありきたりの褒め言葉で愛する女性を称えて、ありきたりの愛情表現をするが、ヴァイオラの挑発的な言葉と態度に触れて、彼が本当の愛を自覚する重要な山場となっている。直感的な一目惚れが真実の愛に成長したのだ。

この後、ウィルとヴァイオラは、彼女の寝室でめでたく結ばれ、二人の関係を現在進行形で反映して書かれている芝居『ロミオとジュリエット』は、少なくとも途中までは、あたかもハッピーエンドで終わる喜劇のごとく、順調に進んでいく。元々この芝居はヘンズロウの発案で『ロミオと海賊王の娘エセル』として着想され、酒場で出会ったマーロウに筋書きのヒントを与えられ、海軍大臣一座の主役アレンにジュリエットの名前を示唆されて、徐々に出来上っていく。実際に、『ロミオとジュリエット』という芝居は、ロミオとジュリエットの秘密結婚で第二幕が終わる。しかし、第三幕に入ると、惨劇が起こり、悲劇へと変わっていくのだが、そこにはまた、ウィルとヴァイオラとの関係の変化が投影されているのである。ヴァイオラの言葉の通

り、貴族の令嬢と一介の（当時は下賤とされた役者たちに芝居を提供するやくざな職業の）劇作家で、かつまた妻子持ちのウィルとが現実の世界で結ばれるはずがなく、二人の愛は、所詮、“Call love”「小娘の幼い恋」に過ぎなかつたと彼女は言うが、しかし、彼女は本当にウィルを心底から愛していたのだ。二人が和解して、川辺でウィルにキスしながら、ヴァイオラが打ち明ける言葉「わたしはいま誓うわ、たとえそれが神の前での神聖な誓いでなくとも、厳粛な誓いよ。わたしは寡婦としてウエセックスに嫁ぎます」は、万感の思いを込めた真心から出た彼女の意思表示である。

このように、小舟の場面におけるウィルの恋の歌の慣例に則った表面的な愛の想いが、ヴァイオラというフィリターを通り抜けて、たとえ（当時たいていは親が決めた）結婚という現世的儀式で結ばれることは叶えられなくとも、ヴァイオラは真の愛を胸底に秘めて嫁ぐし、ウィルとしては、二人の恋愛が『ロミオとジュリエット』、『十二夜』という現在なお世界中で読み継がれ、上演され続けている劇作品として結実したことで、劇作家シェイクスピアにとつて、目度いことかもしれない。もちろん、この映画で描かれるウィルとヴァイオラとの恋の経緯とそれにまつわる出来事は全てフィクションではあるが、私たち観客にとつては、色々な意味で、非常に興味あふれる内容となつ

ている。

【映画情報】

監督…ジョン・マッデン

脚本…マーク・ノーマン、トム・ストッパード

出演…グウィネス・パルトロウ（ヴァイオラ・デ・レセツ
プス・架空の人物）、ジョセフ・ファインズ（ウィリアム・
シェイクスピア）、ジュディ・デンチ（エリザベス一世）、
ルパート・エヴェレット（クリストファー・マーロウ）、ジェ
フリー・ラッシュ（フィリップ・ヘンズロウ）、コリン・ファ
ス（ウエセックス卿・架空の人物）、ベン・アフレック（エ
ドワード（ネッド）・アレン）、イメルダ・スタートン（ヴァ
イオラの乳母・架空の人物）、トム・ウィルキンソン（高
利貸しのヒュー・フェニマン・架空の人物）、アントニー・
シエア（モス博士・架空の人物）、サイモン・カルー（饗
宴局長ティルニー）その他。

製作年（国）…一九九八年（米）／上映時間…一二四分